

横浜市寿生活館職員の方々 その2 相談室！？ 人間交差点！？

横浜市寿生活館の建物は当初2階建てでした。昭和46年に増築され4階になりました。1階は保育園。2階が相談所でした。2階に上ると相談室は廊下から見わたせて、職員がどこにいるかわかります。子どもも大人も自由に出入りしていて、相談する人や子ども会や地域行事の打合せやらで、活気がありました。そんな中で、机でうとうと舟を漕いでいる相談員がいます。Tさんです。きっと、夜中じゅう街の中で活動していたのでしょう。Tさんたちはボヤの一室を借りて、ボラソニアと子どもたちの居場所として「子ども文庫」を開いています。夜は夜勤で働く両親の子どもを預かる場所ともなっています。相談室に入ってきた街のおおちゃん、Tさんの肩をひしゃりと叩いて「仕事中寝ている奴があるか」とどやします。うつつらと目をあけたTさんは、鷹揚にでも本当に申し訳なさそうに「あ！すいません」と言っておおちゃんと言を始めました。他の職員にはいつもの光景です。

この相談室は、雑談の場であり、社交場でありという具合で、寿ボヤ街に住む人々の人間交差点のようであり、街の重要な諸活動が生み出されるという場でもありました。そんな雑多な中から個々の深い相談になっていくことも勿論あります。

このような形態の「場」は、山谷にも、釜が崎にもありませんでした。山谷でも、釜が崎でも相談の場は、ボヤについて板壁で仕切られた個室がいくつも並んだ中で相談でした。相談が済めばそれで関係は終わりです。僕の感想ですが、相談に来た方の人権やプライバシーを尊重するというよりは、短気で喧嘩っ早い相談者？や感染から相談員の身を守ることに重点が置かれていたように思います。一方で、相談員の配慮に欠ける一言で相談をあきらめる方、口惜し涙を流す方、怒る方もいらっしゃいました。

寿生活館の相談室に来た方々は相談の解決というだけでなく、この場所できいて力を吸収していました。職員も相談に来る方々から力と元気をもらっていました。この相談室は一言で言うなら、寿で暮らす人々と相談員の人間関係の可能性が広がるというふうに言うことができます。それは、寿ボヤ街の可能性に置き換えることもできると思えます。そんな雰囲気だから、相談に来た人もリラックスできていたのでしょう。僕の相談のイメージは、1対1の専門家の力量による相談ではなく、寿生活館の相談室のように、悩みや問題がそのまま生きる力になる可能性を持つ場というにありま

す。寿生活館草創期の相談室は、子どもも、酔っ払いも、老人も、愛人・奇人(僕のこと?)も、喧嘩している人も、夏祭りの段取りを相談している人も…。いろいろな人がごちゃごちゃに居て活気があって暖かく居心地が良い相談室でした。まぎれもない寿の人たちの相談室でした。寿の人々の「生」がもたらしたエネルギー空間と言えるでしょう。

そんなだからはじめから身構えた相談といった雰囲気にはならないようです。相談そのものがお互いの力になっていった不思議な相談室、...なのです。

そんな相談室ともいえない相談室、夢なのかなあ。  
実は、寿福祉センター相談所もそんな雰囲気だった一時期があったんですよ。ほんと！あれは幻だったのかなあ。寿に暮らす方々が持ち込む問題は宝だったんです。その相談は、日雇い労働とボヤの居住がもたらす寿で暮らす人々に共通する問題でもあるのです。寿に住む人々は、周りからは生活ぶりも見透かしますが、実は誰で、どんな人かわかりません。ほんとはこんな人ですと言われても、あまり意味をもちません。今がその人そのもの。みんな無名で貧しい人々。だから、人と関わりを結んでいかないと生きられません。部屋に入り鍵をかければ1人の世界になれるけれども、狭い地域に6,500人の人が住んでいます。超然と一人なんて過ごせません。ひとたび外に出れば多くの人と接します。

話はしなくとも街角に坐して通りを見ている人生劇場が目の前に展開しています。それも触れ合いです。保育所前の職安広場の階段に何人も座っている方々がいます。僕もたまにそこに座って通りを歩きすぎる人々を見ていると、半日なぞすぐ経ってしまいたい。今はそんな余裕はなくなりましたが。

さて、プライバシーや個人情報保護が強化されるにつれて、人の関わりや連なりが希薄になっていきます。相談室も来るものは拒まずだったことが規制されるようになりました。

時を経て寿生活館の開放的でダイナミックな相談室兼社交場は、仕切りが付けられ、外からは相談員の姿が見えなくなり、やがて、受け付けを通らなければ相談員と相談ができるという風に変まりました。そうなるに次々に規制を設けるようになります。そのたびに伸びやかな雰囲気は失われ、相談は緊張感が支配する相談のための相談になります。相談所は相談員のための相談所になってきているのではないのでしょうか。何気なく来る人は少なくなり、やがて、まったく誰も来なくなり、相談がなくなっただけではありません。日常の付き合いが薄れてくれば、付き合いの中で相談が産まれてくるということもなくなり、寿で暮らす人たちは相談する前に人間として呼吸ができる場所かどうか、

敏感に察知します。危険なところには近寄りません。相談を通して自尊心を傷つけられた経験は多いようです。住所、氏名はと聞かれることもつらいのです。やがて相談所は見限られていきます。僕には、多くの相談所がそのような方向に推移しているように思えてなりません。実は、相談所は相談をするという場ではなくて、相談者も相談員も等しく人間として出会う場ではないかと思うのです。相談は実は相談所のほんの一部の機能にすぎないのではないのでしょうか。当時の相談室の光景を思い出して考えました。

生きる力を見出せる相談所の回復。その実現は不可能なのでしょうか。単に時代という言葉で片付けていいものなのかどうか。自問自答しています。

寿生活館の草創期を駆け抜けた職員の中には、すでに鬼籍に入られた方もいらっしゃると思います。当時の職員の皆様へ感謝と尊敬をこめて。  
次回は また考えます。